

機関番号：34504

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720074

研究課題名（和文） 回帰するモダニズムと1970年代英国演劇—D・ヘア、D・エドガーの上演分析

研究課題名（英文） The Return of Modernism in the 1970s English Drama: Analyzing the Forms of Dramatic Productions of D. Hare and D. Edgar

研究代表者

大貫 隆史 (OONUKI TAKASHI)

関西学院大学・商学部・准教授

研究者番号：40404800

研究成果の概要（和文）：主としてレイモンド・ウィリアムズによって、1960年代以降にその拡張が試行されてきた“the modern(ity)”概念を踏まえると、1970年代英国演劇の、少なくとも一分派には、ひとつの重要な特徴として、「疎外されたもの」同士の共同性(community)という「感情の構造」を析出することが可能であり、これと、その上演形式を切り離すことができない、と考えられる。この観点は、今後の70年代英国演劇研究に寄与しうるものと思われる。

研究成果の概要（英文）：With the idea of the modern(ity) that has been struggled to be developed mainly by Raymond Williams since the 1960s, we can detect some essential “structure of feeling”—a community of the alienated—at least in one sect of English dramatists in the 1970s. This structure of feeling cannot be separated from their forms of dramatic productions. This kind of point of view will contribute to further development of research into English drama in the 1970s.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：モダニズム、モダン／モダニティ、英国演劇

## 1. 研究開始当初の背景

従来的には、1970年代英国演劇を、ジャンルとしての演劇を可能にしている「様式」自体への探求がはじまった時期とみなす、C. Inness, *Modern British Drama* (2002)をその代表格とするような解釈が支配的だった。そこにあるのは、「現実模倣的(mimetic)」様式の失効によってイブセン的な演劇における「自然主義」が不可能なものとなった (Inness, p. 199) という歴史認識である。ただしここでは、演劇作品における「様式探求」

という要素を論じる際に、モダニズムという語が忌避され、結果、1970年代演劇は、実質的にポストモダンのものとして位置づけられてきた、といえるだろう。

その一方で、本研究が目指すのは、回帰するモダニズムという視点をとることによって、1970年代をモダニティという問題系から切り離すことなく論じることである。

## 2. 研究の目的

(1) 1970年代を、ポストモダニズムの勃

興期ではなく、モダニズムの回帰の時代という視点をとる本研究の目的は、「有機体社会 (organic society)」への渴望という近代特有の事象が、1970 年代演劇において「全体性 (wholeness)」という形式をとって再浮上する様相を解明することである。

(2) 有機体社会論については、20 世紀における有機体論の浮上を論じた Jed Esty (*A Shrinking Island* 2004) が有益な先行研究として存在する。本研究はこれらの研究を批判的に受容しつつ、レイモンド・ウィリアムズ *Modern Tragedy* (1966) による議論を深化させることによって、有機体論を単純に否定しきってしまわない形のアプローチが採用された。つまり、社会が有機体的なものであって欲しいという願望は、実際には、全体性／総体性 (wholeness/totality) といった用語をつかって記述すべき現象として回帰するのではないかと、という視点のアクチュアリティ (実際性) を探ることが目指される。

(3) (2) の理論的研究を基礎としつつ、本研究が考察対象とするのは、1970 年代演劇を代表する存在である、ディヴィッド・ヘア (1947～) 及びディヴィッド・エドガー (1948～) である。本研究は、「自然主義的」演劇とされる J・オズボーンら 1956 年世代と対比されて語られる、1968 年世代の演劇人に焦点をあてることになるが、「有機体性／全体性」という問題系に深く関係している演劇人として、D・エドガーおよび D・ヘアらを考察する。

### 3. 研究の方法

(1) ①ルネサンス期の演劇と比すれば、その先行研究の蓄積において、まだまだ開始されたばかりのものとさえ言える戦後演劇史研究については、記述のための理論的考察が、相当程度求められているとも言える。

②とはいえ、戦後演劇史の、いわば一般理論のようなものを、早急にくみ上げてしまうと、20 世紀前半までの演劇史との違いが盲点に入ってしまう、戦後文化史における連続性と切断性を見落としてしまうことになりかねない。

③したがって、「研究開始当初の背景」「研究の目的」に記したような、演劇史記述の理論的基礎の構築が不可欠であるという、視点を本研究は採用する。

④③の観点を踏まえ、かつ、20 世紀前半の演劇史／文化史との過剰な切断を避け、加えて、年代ごとの特異性を抽出すべく、モダニズム／モダニティ見直し作業、及び 20 世紀英国における有機体論考察という近年の潮流を踏まえたうえでの、1970 年代演劇の再歴史化の端緒を付けることを目指すことが、本研究の最大の目的である。

(2) (1) の目的を遂行すべく、本研究は、

従来の演劇史既述にみられる、演劇的技法 (シアトリカルティ) の直線的な発展を軸とする視点を、批判的かつ発展的に継承するため、「モダニズムの回帰」及び「有機体性／全体性批判」という視点からの 1970 年代演劇研究を期す。

(3) (2) の視点を基礎にしつつ、1970 年代のヘア、エドガーに見られるのは、断片化した社会生活の暴露ではなく、全体性に近接しつつも、それを批判する方法の探求であったことを浮き彫りにすべく考察を進める。

(4) (2) 及び (3) を進めるなかで、「モダン／近代的なもの (the modern)」の経験は、従来モダニティについて指摘されてきたように、1960 年代ないしは 1970 年代にひとまずの終焉を迎える (*New Keywords* 2005, p. 269) というものとは考えない方が、生産的な議論が可能である、という視点を方法として採用した。

### 4. 研究成果

(1) 「研究の目的 (1)」及び「同 (2)」を進めるべく、R・ウィリアムズ *Modern Tragedy* (1966) を主たる対象とし、関連文献を読解しつつ考察を進めた。

①「研究の方法 (1) ④」に記したモダニティという問題について、英語圏の文学・文化研究のなかで、もっとも先鋭的な観念のひとつを提示しているのは、アメリカの批評理論家 Fredric Jameson であろうことに、ひとまず大きな異論は提示されないものと思われる。大きな影響力をもつジェイムソンが用いる重要な参照枠のひとつは、G・ルカーチである。そして、そのルカーチは「叙事詩」を重視した理論家であった。その一方で、*Modern Tragedy* のウィリアムズは「叙事詩」ではなく、「悲劇」をその出発点としている。ここからはどのような意味が生じてくるのだろうか、という問いを持ちつつ、*Modern Tragedy* の議論を進めた。

そのなかで、本研究は、*Modern Tragedy* を読み解くことで、小説的な「ナラティヴ」ではなく、演劇的な「アクション」に依拠するモダニティ論の可能性を探った。

こうした作業を精緻化すべく、「演劇的モダニティ——レイモンド・ウィリアムズにおける〈アクション〉概念について」と題した口頭報告を、日本演劇学会全国大会で行い、演劇学の専門家より貴重な知見を提供して頂いた。

その後、口頭報告時のコメントを反映させるべく、点検作業を進め、口頭報告原稿に削除修正を加え、「演劇的近代 (モダン) —— *Modern Tragedy* と有機体／全体性、経験、そしてアクションの問題」と題した拙稿を、英文学関連の専門家を主たる対象とする雑誌に発表した。

そこで公表したのは、有機体性というものが、従来のな、素朴な疎外論的枠組みより生じる幻想に過ぎないものではなく、モダンティという時空間において、その形式を変容させつつ回帰してくる、ということである。

具体的には、以下のような知見を提示した。「Williams は古典期ギリシア文化の特徴は「制度、行為、感情とむすびついた、驚嘆すべき強固な感情 (beliefs) のネットワーク」にあったと述べる。個別のかつ総体的なアクションを可能にするギリシア悲劇も、このネットワークの一部であり、芸術あるいは娯楽という、他の活動 (action) から切りはなされたものとして悲劇が存在しているわけではない。形而上的なものと物質的なもの、あるいは個人的なものや社会的なものは、容易には切断できない。そして Williams は、デュオニソスの演劇祭の性質を「有機体的 (organic)」(39) と形容することになる。ここで彼のロマン主義的ヴィジョンを非難するのは、あまりにも早計である。遠藤論文 (2006) が「‘Organic’ についての覚書」(Culture and Society 263-4) を引きつつ指摘するように、「organic」は、その語源に「道具 (tool, instrument)」という意味が存在する厄介な言葉に他ならない (15)。換言するのであれば、「有機体的」という語には、生命体のごとく密接に関連しあっている状態 (滑らかさ) という意味と、人為的に獲得された状態 (機械/人工性) という意味の双方が同居している。この不気味な両義性を、現存するギリシア悲劇作品の「達成物 (achievement)」(38) としての側面を強調する Williams が、意識していなかったはずはない。アイスキュロスにかなする記述 (DIB 16) をここで借用するのであれば、先の「緊張感と繊細さ」は、自然に生じたものではなく、あくまで「勝ち取られた (won) もの」なのである。

とはいえ、「有機体的」という語が *Modern Tragedy* に登場するのは、一度きりのことである。「経済学批判要綱序説」の著名な一節にあるように、ギリシアという「人類がもっとも美しく花咲いた人類の歴史上の子供時代」は、「二度と帰らぬ段階」なのだ。ただし、Williams が Marx に逆らっていること——*Modern Tragedy* のギリシアは人類の幼年期ではない——そして、「序説」に独特な力点の移動をほどこしていることに注意しよう。ギリシア芸術が「永遠の魅力」(「序説」186) を放つことそれ自体に、Williams の力点は置かれぬ。そうした「魅力」、すなわち個別性-複雑性-総体的性の「滑らかな」連関が不可能となった歴史的制約のなかで、近代の劇作家が、有機体性にかかわって全体性を獲得しようとする様相を記述すべく、彼はギリシア悲劇を、あくまで方法的に見出すのだ。

それは、ローマ時代から中世をへて近代にいたる悲劇を断罪するための道具ではない。むしろ、近代における悲劇的アクションを吟味するための方法なのである」(「5. 主な発表論文等」雑誌論文②p. 41 より抜粋)。

つまり、有機体性にせよ、その近代における代替物としての全体性にせよ、たんにイデオロギー的な幻想と否定してしまうと、近代演劇の重要な一側面が見えにくくなる、ということである。

加えて、本研究課題の進展にとって重要な観点として、「アクション」という言葉をめぐむ問題が浮き彫りになったことが収穫として挙げられる。具体的には、「アクションが原則的に終了を迎えることがない、という点に求められよう。過去の出来事の現在における報告、という形式を基本的にとるナラティブと、それは異なるのだ。あるいは、演劇作品を「生産物 (product)」ではなく「上演=生産 (production)」と呼び、演劇をめぐむプロセスに力点をおく彼の唯物論 (DIB 288-9) を踏まえるのであれば、上演 (performance) には完結性が、アクションには継続性が含意されている、といういい方もできるだろう」(「5. 主な発表論文等」雑誌論文②p. 44 より抜粋)。

換言すると、狭義の「上演 (performance)」とは、演劇をめぐむプロセスの終着点ではなく、重要だがあくまで一通過点であり、いわば、戯曲を通した様々なコミュニケーション (伝達・共有) の一つとみなした方が、より生産的 (プロダクティブ) な研究となる、見逃し難い可能性がある、ということでもある。この可能性を追求する上で必要なのが、演劇研究の鍵語としての「アクション」という言葉の、いわば「復権」である。「5. 主な発表論文等」雑誌論文②を準備する過程のなかで読解したウィリアムズの著述が示唆しているのは、ならびに、学会発表②によって得られた知見を報告後に点検した作業が教えるのは、「アクション」という語をめぐむウィリアムズの語法 (演劇的な筋立て、H・アーレント的な活動、行為全般——こういった複層的な意味を保持する語法) のもつアクチュアリティである。アクションのこうした語法によって、狭義の上演だけではなく、戯曲を読むという行為もまた、ある「劇文学」(同じく「復権」を要する言葉である) をめぐむ広範なコミュニケーション (伝達・共有) という一つの地平の上に据えることが可能になり、それぞれのコミュニケーションが相互にネゴシーションを行う様相を考察しようようになる。(なお、このウィリアムズの地平を、モダニズム演劇の最大の達成者のひとりとして評される B・ブレヒトが言う「生産 (プロダクション)」(ブレヒトのこの言葉の語法については、谷川道子『聖母と娼婦を超

えて——ブレヒトと女たちの共生』p. 16 の記述が有益である) と結びつけることが、今後、1970 年代演劇のみならず、ひろく演劇研究、文学研究に資してゆく可能性を、本研究は指摘しておきたい。

②近代演劇を悲劇という観点から包括的に記述することを目指す *Modern Tragedy* 第二部を考察することで、有機体性/全体性という、二項対立の抽象性を減じ、1970 年代演劇の分析に適用可能な語法を見いだすべく努めた。この作業については、「5. 主な発表論文等」雑誌論文①が、その中心的な成果となる。

具体的には、以下のような観点を提出した。「エドワード・W・サイードの卓越したルカーチ論にあるように、“totality”とは——となれば“wholeness”はいうまでもなく——「おおむね非現実的で想像的で、あるいは「想定的」とさえ言うる」(438/162)ものである。とはいえ誤解を恐れずに言い添えるのであれば、非現実的で想像的なものであれ、それは人間がつくりだしたもの(アチーブメント)でありうるし、ひるがえって、それがひとびとに制約(ブラインドネス)をもたらしうるのも事実である——ウィリアムズの力点は、ひとえにここに、すなわち達成と制約のプロセスに置かれる。

以下、第二部についての議論を開始してゆく。その前に、ここでの鍵語となる「全体性 wholeness」、「総体性 totality」、「一般性 generality」の三つについて、簡潔にまとめておこう。「総体性」、「一般性」は、基本的に、「全体性」が再編成されたものとして位置付けられているわけだが、「全体性」とは何かをあらためて確認しておく必要があるだろう。ここで参照せねばならないのは、他ならぬギリシア悲劇とは何かを定式化したアリストテレスその人である。「ある全体をもったアクションの再現」、と悲劇を定義しつつ(ただし基本的にウィリアムズは、悲劇を「再現」とは捉えていない)、アリストテレスは次のように「全体 whole」を定義する。

全体とは、初めと中間と終わりをもつものである。(39)

ただしアリストテレス的全体性、つまり「始まり、中間、終わり」があるという全体性は、*Modern Tragedy* 第二部の全体性とは齟齬をきたす。ここでの「全体性」は、そこに存在するものからすると無限に見えるのだけれど、その外部に存在するものからは「閉じている」もの、としてある——球体上の表面をその例として考えてみても良い。本論文第五セクションで参照するトルストイ作品のように、個人的なものが同時に社会的なものであり、と同時に社会的なものが個人的であり、といっ

たような時空間は、第二部的な全体性(のひとつ)である。そこに生きる個人にとってはアクションが「無限」に続くように感じられる。しかし、その外側にいるものにとっては次のように見える。その登場人物たちは、個人と社会というそれ自体は限定的な(疎外をこらむった)カテゴリーのもたらす制約の内部にある、といったように。「全体性」も、その変種としての「総体性」、「一般性」も、先の議論に戻るのであれば、繰り返えしになるが、ある種の達成であり、かつ、何らかの「盲目」を生じさせる制約なのである。[中略]この三つの達成・制約という観点から、第二部であつかわれている作品群を、かなり図式的になるが分類してみよう。「全体性 wholeness」というカテゴリーが、イブセンを主たる対象として論じられる(1a)。その一方で、この全体性というカテゴリーは別の視角からも考察されることになる。イブセンのように最終的には個人が焦点化されるのではなく、社会と個人の密接な絡まり合いという観点からみた全体性の問題が、トルストイを対象に考察される(1b)。そして今度は、全体性ではなく「総体性」が鍵語となる作家たちをウィリアムズは扱うことになるだろう。ここでは、社会全体をパノラマ化して展望すること(全体性)が不可能になり、いくつかの事象の総計というパースペクティブしかとれなくなってしまう。チャーホフ、D・H・ロレンスがここでは考察対象となる(2)。そして最後の達成・制約である「一般性」とは、ある一つの原則が他の事例にも「一般的」に当てはまるというパースペクティブしか採用できなくなっている状態にかかわる。ウィリアムズはこれをストリンダベリにみてゆく。さらには、ピランデッロ、ベケットといった作家たちを論じつつ、ウィリアムズは悲劇的な行き詰まり(デッドロック)/停滞(スタイルメイト)についての考察へと、その力点を徐々に移行させる(3b)。次いでウィリアムズは、行き詰まり/膠着感ではなく、必然性の感覚が支配的になる相(3c)へと移動するのだが、ここでは、「出口がない」という閉塞感ではなく、「避けようがない inevitable」という感覚が最終的には問題になってゆく。*Modern Tragedy*に頻出する鍵語である「必然性 necessity/inescapability/inevitability」は、カミュ、サルトルにあつて、「暴力」の必然性という形をとって悲劇的経験を覆うものとなる。これはブレヒトとの出会い、そして対決を、ウィリアムズに要請することになるだろう」(「5. 主な発表論文等」雑誌論文①pp. 114-6より一部修正のうえ抜粋)。

上記成果公表後の点検作業で得られた知見を補いつつ換言すると、次のようになる。本研究の目的は、1970年代英国演劇を、モダ

ニズム／モダニティという視点から再考するための手がかりを得ることにあるが、その上で、最大の慎重さをもって吟味し回避すべきは、先述したように、1960～70年代に近代（モダン）の経験が途絶し、人びとの生（ライフ）全般が断片化してしまった、という視点である。その上で、有機体性という断片性の対極に位置する視点が有益だが、そのままこれを採用することができないため、全体性を有機体性の代替物としてみならず、という観点を暫定的に採用した。しかし、全体性という言葉だけでは、1970年代演劇の特異性を見いだすには困難が生じる可能性がある。そこで有効になりうるのが、全体性の変種としての「総体性」「一般性」「必然性」という視点であり、これを本研究は指摘する、ということになる。

(2)「3. 研究の方法(4)」に示した方法的特色にかかわる成果として、「5. 主な発表論文等」学会発表①を挙げることができる。ここでは、モダニズム／モダニティの1960年代～1970年代における終焉というナラティブを批判的に吟味して乗り越えるべく、以下のような考察を提示した。

「ロマン主義は、機械と化した社会、すなわち環境から逃亡を試み、個人を絶対化するわけです。自然主義の思想と実践は、社会、ここでの社会とは、人間の意志や行動で変化させうる仕組みのことですが、こうした意味における社会を除外していきます。ロマン主義は、機械と化した社会（環境）を社会とみなして、社会から逃亡するわけですが、またしても繰り返す点で共通しています。

さて以下は第一部第四章「悲劇と革命」の、「リベラリズムの終焉」と題されたセクションからの引用です。

西洋の社会(societies)では、これらの立場[自然主義とロマン主義]が対照的なものとされ、さらには、この二つによる対照が総体的(total)なものとなるのが通例であり、そうなる私達は、そのどちらかを選ばねばならないのだ、自分たちはそういう存在なのだ、と考えてしまう。政治の領域において、私たちに与えられるのは、革命でもなければ、実質的な変化ですらなく、一般にモダニゼーションと呼ばれているものである。言いかえるとそこでは、変化から価値が切り離されているのである。(Modern Tragedy 98)

ウィルソンの名前こそ出ていませんが、「モダニゼーション」というスローガンは、自然主義的思想の系譜に位置づけられる、とウィリアムズが考えていることは明白です。経済

の成長、マーケットの活発化は、自然に生じるものであって、これを邪魔するような社会的価値や繋がり(例えば労働組合)は除去されねばならない、というわけです。一方、「人間の解放」を社会からの逃走にみるトリリングは、本人は嫌がることですが、少なくともこの点においては、疑いなくロマン主義の系譜に位置づけられるのです。

そしてウィリアムズは、ウィルソンやトリリングをリベラリズムの末裔に位置づけ、かつ、あくまで「モダン」の一面として歴史化します。社会が環境と化し環境を制御する科学や技術だけが問題になっていくことだけが「モダン」の運動ではありません。同じく、そうした環境から逃亡して個人のなかのみ「解放」をもとめることだけが「モダン」の運動ではないのです。この二つの系譜のいずれかを選択せねばならない、というとき、そこには、悲劇が足りない、正確には、悲劇的視座(tragic perspective)が不足している。これがウィリアムズの言いたいことです。悲劇的視座が欠けると、1917年の革命(第二次ロシア革命)が「モダン」の経験から除外されてしまうことになります。ウィリアムズの言葉づかいを借りると、「私たち自身に直接的にかかわる活動」として、1917年の革命をみることも、さらには、連綿とつづく社会主義運動をみることもできなくなるのです。だからこそ、ハロルド・ウィルソンは、本当なら自然主義的な“evolution”(進化)とすべき運動を、こともあろうに、“revolution”と呼称することができたのです(「5. 主な発表論文等」学会発表①口頭報告原稿より抜粋の上、引用部分の分量を圧縮し翻訳した)。

報告後の点検作業も踏まえて、上記の見解を言いかえると次のようになる。とりわけ、ハロルド・ウィルソンの政治的言説において点検的にみられるような、ある種の自由な意志に基づく人間的結びつきによる集団、すなわち、大まかにいって19世紀以前の「社会」を、意識無意識に忌避する傾向が、1960年代において支配的になりつつあった可能性が高い、ということであり、この傾向は、人びとの話し合いと合意に基づく社会の変化、という「モダン」の経験を不可視化しつつあったかもしれない、ということになる。

ウィリアムズやH・ウィルソンを視野に入れることで見えてくる、1970年代に向けての、「モダン」の経験をめぐる潮流を踏まえることで、1970年代演劇の再歴史化の端緒を付ける、という本研究の最大の目的への、大きな基礎が得られたように思われる。

(3)(1)(2)の理論的基礎ならびに歴史的視座の構築作業と並行しつつ進めてきた70年代演劇分析作業については、所属研究機関の学部内研究会(商学部教授研究会、平成22年6月23日)において、「そこにいるのは

何のためか？—現前／再現問題と 1970 年代末のデイヴィッド・ヘア」と題した口頭報告を、その成果としてあげることができる。

この口頭報告において、以下のような結論を得ることができた。「最初の問いに戻ります。ここで共有されている願望、その成立が願望されているコミュニティとはどのようなものなのでしょうか？ それは、Susan のような人間たちによるコミュニティです。Susan は、自分自身のことすら思うようにならない、いわば、自分自身さえも縁遠い、自分自身からも疎外されてしまっている人間です。そういう、疎外の果てにしているもの同士が繋がってコミュニティが作られる。英語の community は「共通の性質を保持していること、共通性」も意味する言葉でもあります。この意味の限りでは、観客同士のコミュニティは成立しているのです。ただし、言うまでもないことですが、「具体的な共同組織」という意味のコミュニティの成立は、試行された、試されただけで、失敗に終わっています。ですが、このような願望の共有を可能にするような構造が 1970 年代末に演劇という社会のマイノリティ・セクションにおいて勃興しようとした、ということだけは事実なのではないかと述べ、また、そこでその実現が願望されたコミュニティと、ブレア政権下でキーワードとなったコミュニティとがどのような関係を取り結んでいるかについては今後の課題とさせていただければと述べ、本報告を終えたいと思います」(口頭報告原稿より抜粋)。

これに、当日の質疑応答でのコメントを受けての点検作業を行うなかで得られた知見を補いつつ換言すると次のようになる。

1970 年代末のヘアは、有機体的社会の再興という幻想を批判しつつ、かつ、いわば、疎外の極にあるもの同士の共同性(コミュニティ)を、その上演=生産(プロダクション)形式によって試行しているのではないかと、ということである。これは、(1)の作業で得られた有機体社会批判、ならびに、有機体の近代的代替物を模索することによる、断片性を重視するポストモダニティの回避とモダンの経験継承を試行するものとも解しうる。

また、(2)で指摘したような「機械と化した社会」というモダンの経験の悲劇的な部分のなかでも、最も近接が困難であるとウィリアムズも考えていたと思いき 20 世紀前半の社会主義建設の経験、すなわち、スターリニズム下における人びとの繋がりの究極的な困難さという経験に、1980 年代に接近を試みることになるエドガーについても、おそらく、「感情の構造」という観点からは、その 1970 年代の作業に、ヘアと同様のものを析出しうるものと思われ、研代表者は、今後、この観点を提示すべく模索するものとする。

(4) 本研究を総括すると、明らかになったのは、1970 年代英国演劇の再歴史化の端緒をつけるにあたり、ポストモダニティではなくモダニティ／モダンという視点を導入することのアクチュアリティである。この視点を踏まえると、とりわけヘア、エドガーらをその代表格とする 1970 年代の演劇人グループには、ひとつの共通の「感情の構造」を見いだしうるものと思われる。それは、「疎外されたもの」同士の共同性、という、少なくとも、その起点を自然主義とロマン主義までは遡りうるモダンの経験の継承への願望の表現である。この「感情の構造」と上演=生産形式を切り離すことができない、と考えられる。この観点は、今後の 70 年代英国演劇研究に寄与しうるものと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 大貫隆史 「演劇的近代(モダン)(2)——*Modern Tragedy*と制約、全体性、そして不可避性の問題」、『レイモンド・ウィリアムズ研究』、レイモンド・ウィリアムズ研究会、査読無、第 1 号、2009、113-135
- ② 大貫隆史 「演劇的近代(モダン)——*Modern Tragedy*と有機体/全体性、経験、そしてアクションの問題」、『英語青年』、査読無、第 154 巻第 9 号、2008、38-44

[学会発表] (計 3 件)

- ① 大貫隆史 (文献解題報告)「*Modern Tragedy* 解題——“Modern,” Revolution, and Culture」、新英米文学会 10 月例会、2010 年 10 月 16 日、早稲田奉仕園
- ② Takashi Onuki “Translating/ Interpreting Raymond Williams: Action without Quotation Marks”, (Symposium) Raymond Williams in Transit: Wales-Japan: 2009 年 10 月 16 日、CREW, Swansea University, U.K.
- ③ 大貫隆史 「演劇的モダニティ——レイモンド・ウィリアムズにおける〈アクション〉概念について」、日本演劇学会全国大会、2008 年 6 月 22 日、日本橋学館大学

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

大貫 隆史(OONUKI TAKASHI)

関西学院大学・商学部・准教授

研究者番号：40404800